

尋常小學校讀本

倉知新吾編輯

七

檢定申請書

K1208

50

7

K120.8

50

7

倉知新吾編輯

尋常小學校讀本

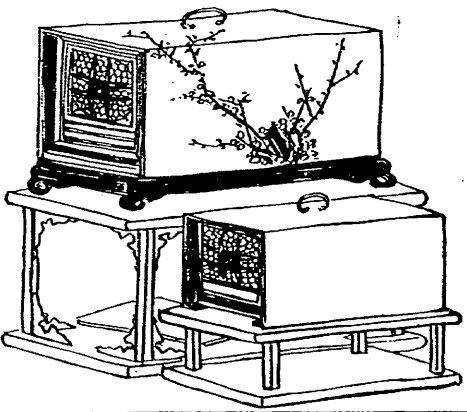
益智館同梓  
古香堂

尋常小學校讀本卷七

第一課

鶯

小鳥の中には善く鳴くもの多し。就中鶯  
を其聲ほがらかふりて諸鳥ふ勝れたり。  
小鳥を飼ふ人鶯の雛を捕へたるときを  
之を善く鳴く鶯の傍に附け置きて其聲



聞くときを漸く小聲ふてまねするふ至

る。其様如何ふもをづかへげなり。  
されど日を経るに従ひ次第小聲高くほ  
いま、ふさへづりいつしかをづかへ  
げある様も失せて後ふを前の鶯ふも劣  
らぬ好き聲となるあり。

善勝飼籠劣

第二課

メジロ

メジロハ、鶯ニ似タル鳥ニテ、形少シク小  
久、羽色ハ黄深クシテ、美ナルコト、鶯ニ勝  
レリ。眼ノ周圍ニ白キ環アルヲ以テ、此名  
アリ。

其聲ハ、稍鶯ニ劣ルトイヘドモ、亦ホガラ  
カニシテ高久甚ダ愛スベシ。

此鳥ハ、餌附キ易ク、且ツ能ク人ニ馴ル、  
ガ故ニ、スリ餌ヲ食スル鳥ノ中ニテハ、最

モ多ク人ニ飼ハル、モノナリ。蒸シタル  
サツマイモ、熟シタル柿ナドヲ好ミテ食  
ス。

環 愛 且 餌 馴

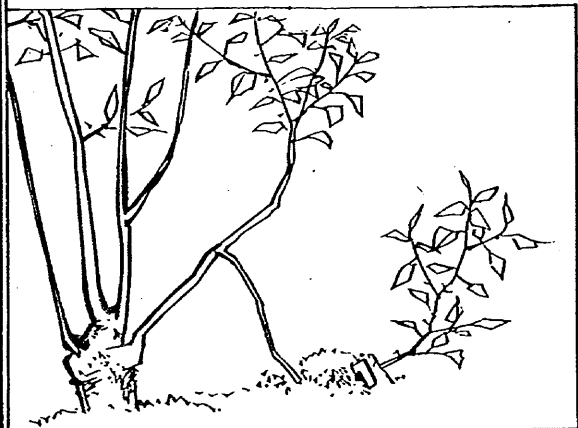
第三課

トリ木 サシ木

日暖ニ、風和ニシテ、庭ノ草木ノ若葉ハ、漸  
クモエ出デントセリ。此頃ハ、トリ木、サシ

木ヲナスニ、最モ好キ時節ナリ。トリ木、サ  
シ木ノ法ハ、サノミムツカシカラズ、隨分  
面白キ事ナレバ、實地ニ  
タメシ見ルベシ。

サシ木ノ法ハ、樹ノ枝ヲ  
キリトリテ、其マ、稍シ  
メリケアル土ニサシ置  
クナリ。カクテ數十日ヲ



經バ、自ラ根ヲ生ジ、葉ヲ  
出ダシテ、遂ニ一ツノ樹  
トナルニ至ルベシ。  
トリ木ノ法ハ、樹ノ枝ヲ  
其マ、撓メテ土ヲオホ  
ヒ、其先ヲ地上ニ出シ置クベシ。カクテ日  
ヲ經バ、自ラ其土ヲオホヒタル部分ヨリ  
根ヲ生ズ。其時之ヲ幹ヨリ切りハナシテ



植ウ。

桑梨柳ナドハ此等ノ法ヲ用フルニ最モ  
ヨロシキモノナリ。サレド如何ナル樹木  
ニモ、ナシ得ラルベキモノニアラズ。中ニ  
ハ此法ヲ施スモ、無功ナルモノ多シ。

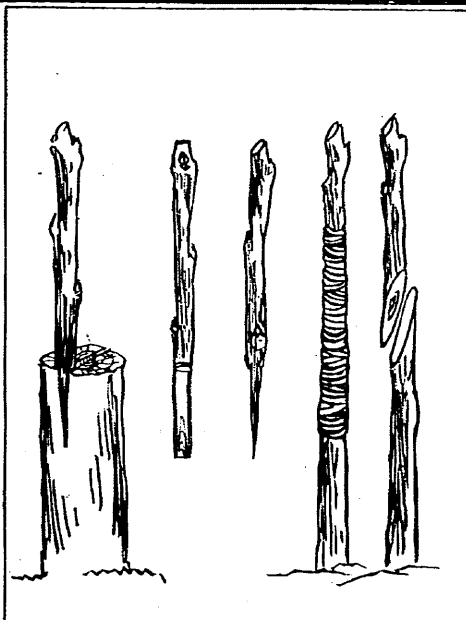
和庭法 隨分 部分 柳 施

第四課

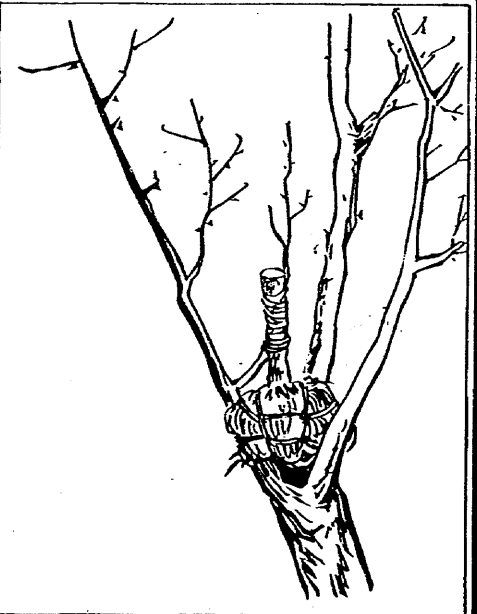
つぎ木

こゝ小澁柿の木を變ドて、甘柿の木とあ  
し、白き花さく木を變じて、赤き花さく木  
となすが如く、樹木の性を換ふる法あり。  
つぎ木の法是なり。

つぎ木小切接と寄接との二法あり。切接  
の法も、臺木と若枝とを、鋭き小刀ふて斜  
に切り、其口を密小接ぎ合せ、日光をさへ  
ぎり、雨を防がんがた、免小藁又ハ菅等小



て密にまとひ或ハ桐油紙等ふてまとひ  
置くなり。又横に臺木を切り放して之を  
縦ふ割り接がんとむる枝の本をくさび  
の形ふ削り臺木  
のこれめふさし  
をさみ前の如く  
藁かどふてまと  
ふもあり。



木鉢ふ植ふ附けて接ぐべき若枝に寄せ  
附け其樹にあるまゝ切接の法の如く接  
き合せ置くなり。

寄接の法も臺木  
を掘り取り土を  
着けたるまゝ藁  
などふて其根を  
包み或ハ之を植

接木も春の半、秋の末頃にあすむ最も宜しとす。かくて能く接ぎ得たるときを必ず若枝と同性ある木となるべし。

接木の法も大抵の樹木ふい施し得べけれども種類異なるものを接ぎ合すこと能わざるなり。

澁 性 鋭 斜 藁 密 縦 割  
削 掘 異

第五課

徳川家光の話

昔將軍徳川家光かりふ出でしときかちふて、此處彼處打ちなが免行き或る寺の前をよぎりしふ折節年の頃八十をかりなる老僧庭ふ出で、手づから接木して居けるが、供の人々後れて、僅に二三人附き従ひければ、僧を貴人とも思ひ寄らず、



其まゝそむき居たりしを、家光をむうむ、  
何事をまはゆぞと、呼びかけしに、僧ハ直ふ  
接木をるよと答へたり。

家光笑ひて、老僧が年ふて、樹の大あるま  
で、生きのびんとも思われざるに、接木し  
て、何ふをるぞと云へむ、僧ハ心得ぬ事を  
いひたまふを。木をつぐを、吾がふめふは  
あらむ、後住の代ふ至りて、大ふなりぬれ

む、林も茂り、寺も黒みあふ。吾を寺のた免  
を思ひてをることありと云へり。家光ハ  
之を聞きて、深く感ずたりしが、其うちふ  
供人ども多く來りければ、僧を始免て貴  
人あるを悟り、ふるひたそれて、奥へ逃げ  
入りしを、召し出だして、物など與へしと  
ぞ。

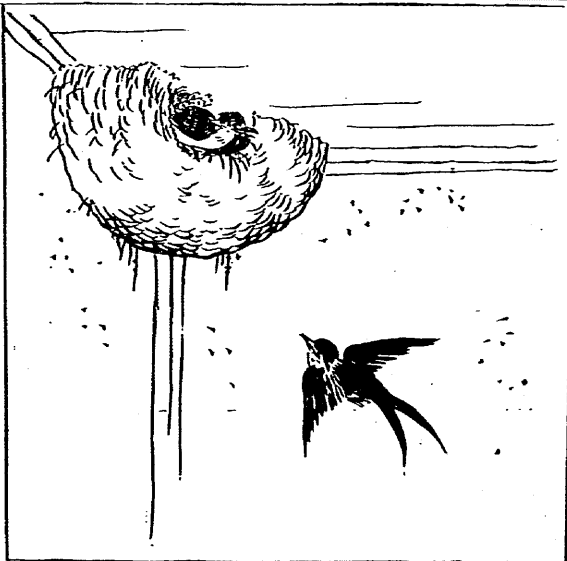
彼處 老 茂 悟 逃 奥

第六課

燕

燕ハ、愛ラシキ小鳥ニテ、背ハ黒ク、腹ハ白ク、アギトハ赤ク、尾ハ長クシテ、其サキハ二ツニ分ル。翼モ長ク、且ツ強クシテ、能ク空中ヲ飛ブ。

此鳥ハ、秋ノ末ニ至レバ、何處ヘカ飛去リテ、翌春ノ末頃ニマタ來リテ、人家ニ巢ヲ



造ル。巢ハ最初泥土ヲ運ビテ、固ク塗り、後ニハ、馬ノ毛或ハ藁屑ナドヲ集メテ、其中ヲ温ニナス。此鳥ハ、空中ヲ飛ビ

ナガラ、巧ニ虫ヲ捕ヘテ食ス。最モ植物ニ害アル虫ヲ多ク食スルガ故ニ、農業ニ利

益アリ。決シテ殺スベカラズ。

背 腹 泥 固 温

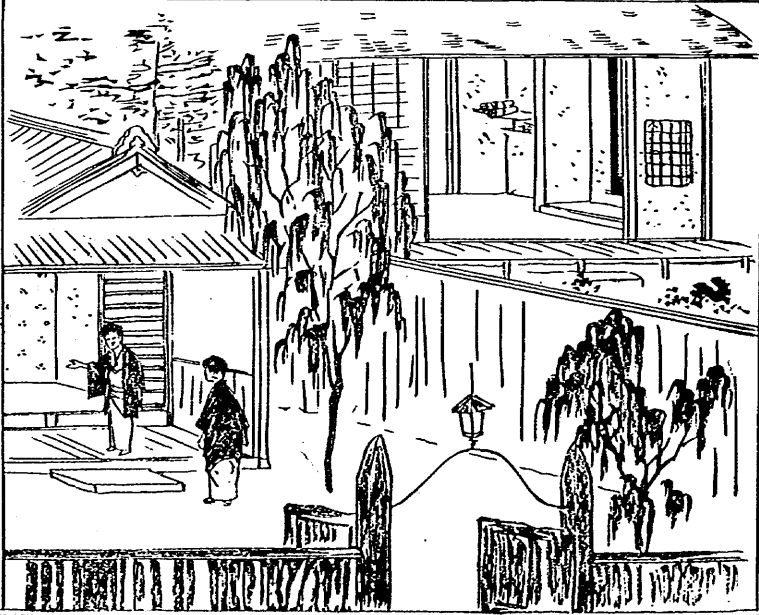
第七課

家の内

門を通れば、正面に玄関あり。玄関は表の方へ、人の出入する口なり。玄関は狭き板の間あり。之を敷臺と云ふ。

主人は敷臺へ出で、客を迎へ居れり。や

がて坐敷のみち  
びくからん。坐敷  
を又客間とも云  
ふ。客間と敷臺と  
の間にあるを、次  
の間といふ。  
坐敷のみちと敷  
設けたり。と大の



ときふちがひ棚あり。とふは、掛物をかけちがひ棚よを、卷物の類を置けり。家族の常に坐臥する處を、居間と云ひ、食物を調理する處を、臺所と云ひ、臺所より出入する口を、勝手口と云ふ。家の内ハ常み掃除し、或を拭ひて、清潔ふまべし。

玄關 狹 迎 客 卷 家族 卧  
拭 調理 掃除

第八課

茶

茶ノ木ハ冬ノ初二花ヲ開キ、其實ハ翌年ノ花ノ開ク頃ニ至リテ、全ク熟ス。實ヲ時クハ、十二月頃ヲ宜シトス。時キテヨリ三年目ニ、始メテ其芽ヲ摘ミテ茶ヲ製ス。茶ハ、五月ノ初頃ニ、其一番芽ヲ摘ミ、三十日バカリヲ經テ、又ニ番芽ヲ摘ミ、是レヨ

リ三番、四番、五番マデ、摘ムコトヲ得ルナ  
リ。一番、二番ニ摘ミタルモノハ、芽柔ニシ  
テ上品ナリ。三番、四番等ニ摘ミタルハ、剛



クシテ下品ナリ。  
茶ヲ製スルニハ、先ヅ  
釜ニ湯ヲワカシ、摘ミ  
タル茶ヲ蒸籠ノ中ニ  
入レ、之ヲ釜ニ掛ケ湯



氣ニテ暫ク蒸シ、直ニ  
取り出シ、ムシロノ上  
ニヒロゲテ、冷ヤスナ  
リ。  
カクテホイロニ火ヲ  
起シ、之ニ助炭ヲ載セ、其中ニ蒸シタル葉  
ヲ入レ、幾度モ、モミナガラ、或ハ集メ、或ハ  
散ラシ、其乾クヲ待チテ、更ニ之ヲ、火氣ノ

極メテ弱キ他ノホイ口ノ上ニ、一夜載セ  
置クナリ。

翌朝ニ至リ、乾キアガリタル葉ヌフルヒ  
ニテ幾度モフルヒ、葉ノ善惡等ヲエリ分  
ク之ヲツボナドニ入レテ、濕氣ヲ受ケヌ  
様ニ貯フ。

蔘 摘 幾度 乾 極 弱 惡  
濕氣 剛

第九課

野中傳右衛門

野中傳右衛門ハ土佐ノ人ナリ。ヒト、セ  
江戸ニ往キテ、歸ラントスルトキ、郷里へ  
送リシ手紙ノ中ニ、今度江戸ヨリ、蛤ヲ土  
産トシテモタラシ歸ルベシト、云ヒヤリ  
タリ。其頃土佐ニハ、蛤ナカリシ故、郷里ノ  
人々ハ、珍シキ品ヲ食ヒ得ベキ事ト思ヒ、

喜ビテ傳右衛門ノ歸ルヲ待チ居タリ。  
然ルニ傳右衛門ハ國ニ  
着クヤイナヤ其蛤ヲ悉  
ク海中ニ投ゲ込ミシカ  
バ人々大ニ怪ミ其由ヲ  
問ヒシニ傳右衛門ハ打  
チ笑ヒテ此物ハ獨リ君  
等ノ土産ニ持チ歸リタ



ルノミニアラズ永ク君等ノ子孫ノ食用  
ニモセンガタメカクハナシタリト云ヒ  
シガ年經テ果シテ數多ノ蛤ヲ産スルニ  
至レリト云フ。

郷里 蛤 珍 怪 永

第十課

猿の話

一人の男草を刈りて、稍疲勞せしむ傍

小鎌を置きて、休み居りしに、いつのまにか、一足の猿來りて、其鎌を奪ひ去りける。やがて男も、鎌の向らざる小心づき、うこら尋ぬまども、見にざりしが、ふや仰ぎ見れど、猿も、既小高き樹の上小、鎌を持ちて登り居たり。

男ハ、あをて、頻小鎌を返せと呼べども、猿も、返へをべくも、見にざりき。男ハ、大に困じ、合掌して、ひたをらたのむ様小見せたる小、猿も亦合掌をるまねして見せたり。男も途方小くまゝが何か考ふる事ありけん、同ト場所小、草刈り居たるもの、鎌を借り、其背小て、掌を兩三度打ち、面白げ小見せられたれど、猿もまた之をまねして打ちしに、忽ち其刃小て、手を傷け、きつと一聲さけびて、鎌を落したりとぞ。



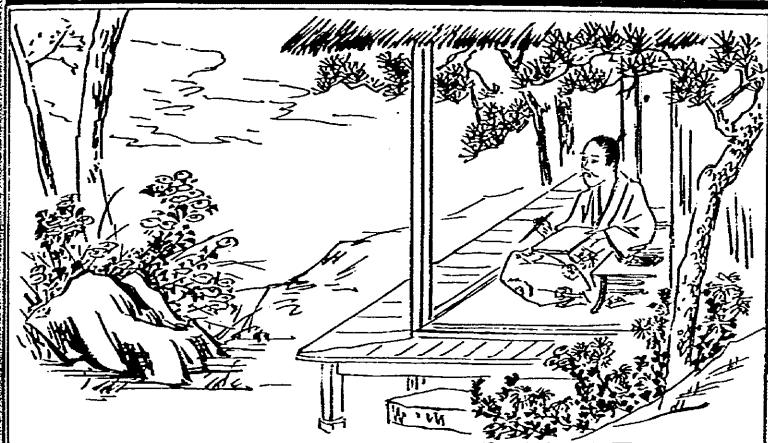
疲勞 鎌 奪 登 因 合掌 借  
又 傷

第十一課

菅原道真

菅原道真ハ、宇多天皇ニ事ヘテ御心ニ  
カナヒケレバ、大ニ用ヒサセタマヘリ。次  
ノミカド、醍醐天皇御位ニ即カセタマ  
フニ及ビテ、右大臣ニ進メラレタリ。道真

感激シ、心ヲ盡シテ天下ノ政ヲスベ、君ヲ  
輔佐シ奉リタルヲ左大臣時平等ハ、其重  
ク用ヒラル、コトヲ子タミ、無實ノ罪ヲ  
構ヘテ、天皇ニ讒言シケレバ、俄ニ官ヲ  
オトサレテ、筑紫ノ國ニウツサレタリ。  
道真筑紫ニイタリ、自ラ慎ミ、門ヲ閉ヂテ  
出デズ。サレド尚ホ君ヲ思フ心深クシテ、  
都ニアリシ時、宇多天皇ヨリ、賜ハリシ



御衣ヲ朝夕身ニハナサ  
ズソヘラレタリ。  
カクテ三年ヲ經、五十九  
歳ニシテ、身マカラレタ  
リ。其後道真ノ罪ナキコ  
ト、明ニナリシガ、一條  
天皇ノ御時、正一位太政  
大臣ヲ贈ラレタリ。

今天滿天神トテ、何處ニモ社ヲ建テアガ  
メ祭レルハ、此道真公ノ御タマナリ。

進 感激 盡 政 輔佐 罪 構  
讒言 俄 慎 閉 賜 贈

第十二課

管公け歌

公は徳高く、才をぐれられたは、これから  
は、又深く學問に長し、其ものせられたる

文章詩歌いと多し。あはて海をよまれける歌に、

うみあらばたゞへは水れそあま  
でも清き心ハ月ぞてらさん

又菊をよまれけるに、  
あき風れ吹上にたては白菊ハ花  
ああらぬかあまれよをはあ

第十三課

里程と段別

里程も六尺を以て一間とし、六十間を以て一町とし、三十六町を以て一里とし、通常吾等が陸地の長さを計るにも、此里程を用ふれども、海路或は鐵道などは、いぎをその里程より、海路ふても、「ハツト」を以て算し、鐵道ふても、「マイル」を以て數ふ。一「ハツト」を凡そ十七町ふ當り、一「マイル」

を、凡そ十五町むかりふ當るなり。  
地の廣さを計るふも、六尺四方を一坪とし、是れより、十百千萬を以て數ふ。又一坪を一歩と稱して、三十歩を一畝とし、十畝を一町とし、十段を一町とし、是れを段別と云ふ。

陸 計 坪 段 畝

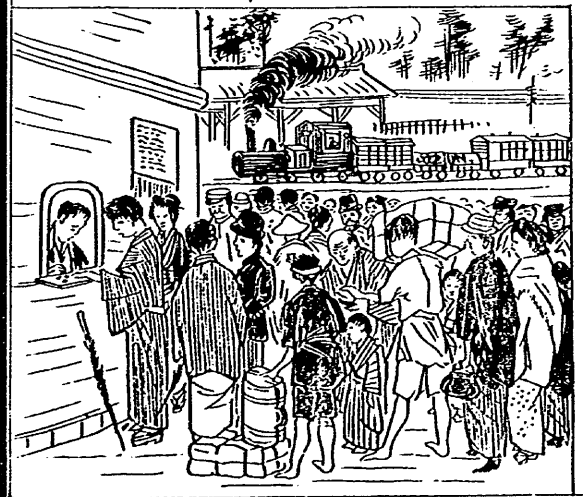
第十四課

鐵道

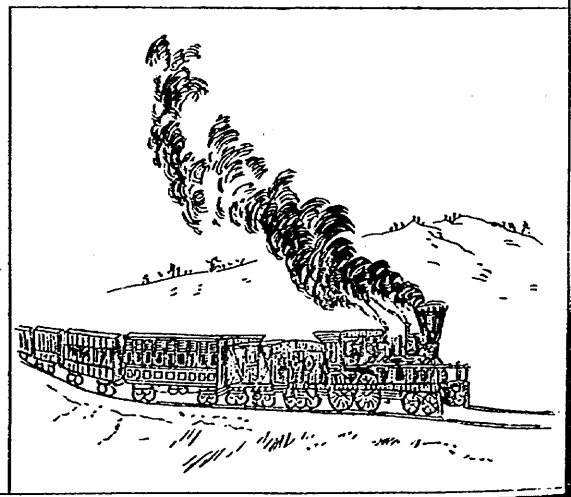
數多ノ車ヲ連ネ、烟ヲ卷キテ馳セ來タルモノアリ。コレハ、瀛車ノ鐵道ヲ走ルナリ。此内ニハ、數多ノ人ト、荷物トヲ載セタルナラン。鐵道ハ、鐵ニテ造リタル棒ヲ連ネテ、二筋ニ敷キナラベタル路ナリ。列車ノ最モ前ニ立ツテ、機關車ト云フ。機關車ハ、蒸氣ノ仕掛ニテ、器械ヲ動カシ、車

ヲ廻ハシ、數多ノ列車ヲヒキテ走ルモ  
ノナリ。

コ、ハ鐵道ノステーションナリ。數多ノ乗  
客ハ、順次ニ切符ヲ買  
ヒ居レリ。ヤガテ瀛車  
ハ、ステーションヲ發  
スルナラン。ステーション



ヨントハ、車ヲ停メテ、  
旅客ノ降り下リト、荷  
物ノ上ゲオロシヲナ  
ス處ナリ。



瀛車ニテ、旅行スルモノハ、ステーションニ  
テ、行先ノステーションマデノ切符ヲ買  
ヒテ乗車シ、其ステーションニテ、車ノ停

マルヲ待チ直ニオリ、切符ヲ渡シテ出ヅ  
ベシ。

鐵道ヲ敷ク處ハ、平坦ナルヲ要スルヲモ  
テ、長キ道ヲワタル間ニハ、或ハ山ヲ穿チ  
テ、トン子ルヲ設ケ、又河ナドニハ、イト堅  
固ナル橋ヲカケワタセリ。

瀧車ノ速サハ、大凡一時間ニ、十五六マイ  
ルヲ馳スルヲ常トス。サレバ今朝見シ友

モ、夕ニハ、百里ヲ隔ツル旅ノ空ニ、在ルコ  
トアラン。

馳 棒 筋 機關 順次 切符

停 平坦 穿 隔 在

第十五課

知章と賴賢

一の谷の戰に平家敗れて、皆ちりぐみ  
なりけるが、新中納言知盛も、濱邊をさし

て、落ち行きたるを、敵兵三騎追ひ來れり。知盛の家臣監物太郎頼賢、其一人を射たりしが、残る二人打ちてかゝり、知盛已に危く見江ければ、其子知章一人、小組附きて、其首を取れり。其間、知盛を逃れたまども、敵の大勢寄せ來れむ、知章を尚ほ父を落さんとして、ふみ止まり、遂に討死したりき。太郎頼賢之を見て、弓矢投棄て、敵中へをどり入り、知章を討取りしもの、首を斬りしが、敵兵の矢も、其ひざを射られたれば、今は是れまでなりと思ひ、腹かき切りて、死したりとぞ。

敗 敵 殘 危 騎 首 斬

第十六課

ねむ土細工

ねむ土を白ふてはき、水を加へて、よくこ

ねたる後之をぬき犬も小包み置きかくて其土をかたに押し込み稍乾きたはを待ちかたより取り出さかたふを両面のものと半面のものもあり両面のものかたより出だして直ふ裏表を合さるかたをれむがふによりていろくの形を生む之をよくほしてかまに入れ焼きて後彩色を施す。



彩色を施さふを先づにかもふごふんを交ぜたるものふて下塗り其上に各種の色を施す。ねむ土細工ふも菓物あり牛馬犬猫などあり鯉鯛金魚等あり或ハ七福神あり。福助あり。相撲と



里あり。皆小兒の喜びて、もてあそぶ所あらん。

焼 彩 鯉 鯛 相撲

第十七課

つな女の事

昔若狭の國、西津といふ村ふ、つなといふ娘あり。年十五の頃、或る人の内ふ召使を  
れけり。或る日主の幼兒を連れて遊びけ  
るに、何處よりか狂犬走り來りて、をどり  
かゝりける。つなを驚きて幼兒を抱き抱  
ほひしが、狂犬ふかみつかれ、傷數多負ひ  
て、血ふまみれたまど、なほ幼兒をかむひ  
て、動かざりき。人々此様を見て、馳せ集り、  
犬を打ち殺し、つなをいたもりて、主の家  
へ歸したり。  
かくて、つなを身ふ毒氣發して、苦みなが

尋常山崎村評林 卷七

ら、尚ほ幼児のつゝがあかりけるこそう  
れしけれといへり。主も深く憐み、心のか  
ぎり、醫療を盡したれども終ふ失せぬ。  
つゝあが傷負ひける時父の家小あらず母  
此由を聞き、急ぎ來りしが、先づつゝあが事  
をぞ問えて、幼児のあやまちや、あかりし  
と尋ねければ、人々此母ふも感心せぬハ  
なかりけり。

領主此事を聞きて、つゝあの父に、錢を與へ、  
又西津村なる、西徳寺と云ふ地内ふ、つゝ  
あが石碑を建てたりとぞ。

狂犬 抱 負 血 憐 醫療 終  
領主 石碑

第十八課

ウルシ

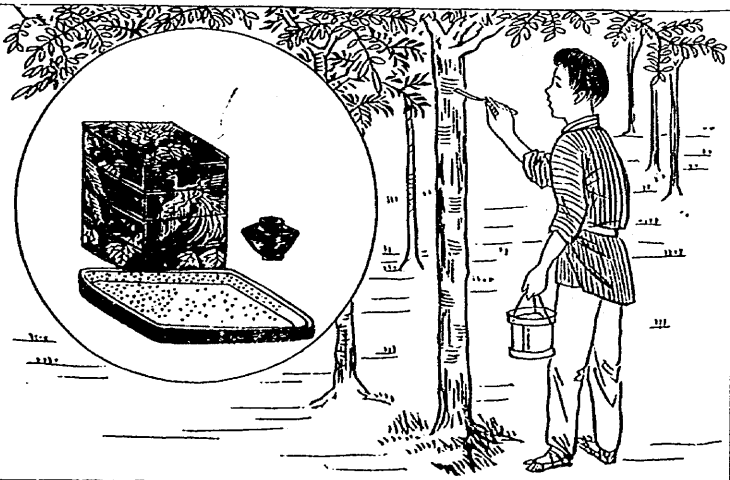
ウルシハ、漆ノ木ヨリ採リテ、製シタルモ

ノナリ。我等ハ、屢山地又ハ路傍ナドニ於  
テ、漆ノ木ヲ植エタルヲ見ル。ウルシハ、濕  
リタル土地ニ適ス。其花ハ、夏ニ開キテ、實  
ハ秋ニ熟ス。其實ヲシボリテ、蠟ヲ採ルモ  
アリ。

ウルシハ、夏ノ半頃ヨリ、秋ノ半マデニ、採  
リタルヲ宜シトス。鎌ニテ樹皮ヲ横ニ傷  
ケテ、其流出ヅル液ヲヘラニテカキ取ル

ナリ。カクテ四日程モ  
經レバ、更ニ前ノ傷ア  
トノ上ニキヅ、ケ、再  
ビ其液ヲ取ルコトヲ  
得ベシ。

此液ニ青、黃、赤、モエギ  
等種々ノ繪具ヲ交ヘ  
テ、器物ニ塗ル。之ヲ塗



物ト云フナリ。

我等ノ平日、用フル膳、椀、重箱、硯箱、タンス、長持等ノ器物ニハ、ウルシヲ塗リタル物多シ。

漆ヲ塗リタル器物ハ、美シクシテ、堅キノミナラズ、又能ク濕氣ヲ防ギ、クサリヲ止ムルモノナリ。

塗物ノ上ニ、金粉ヲ着ケテ、山水、花鳥ナドノ模様ヲ、畫キタルモノアリ。之ヲ蒔繪ト云フ。

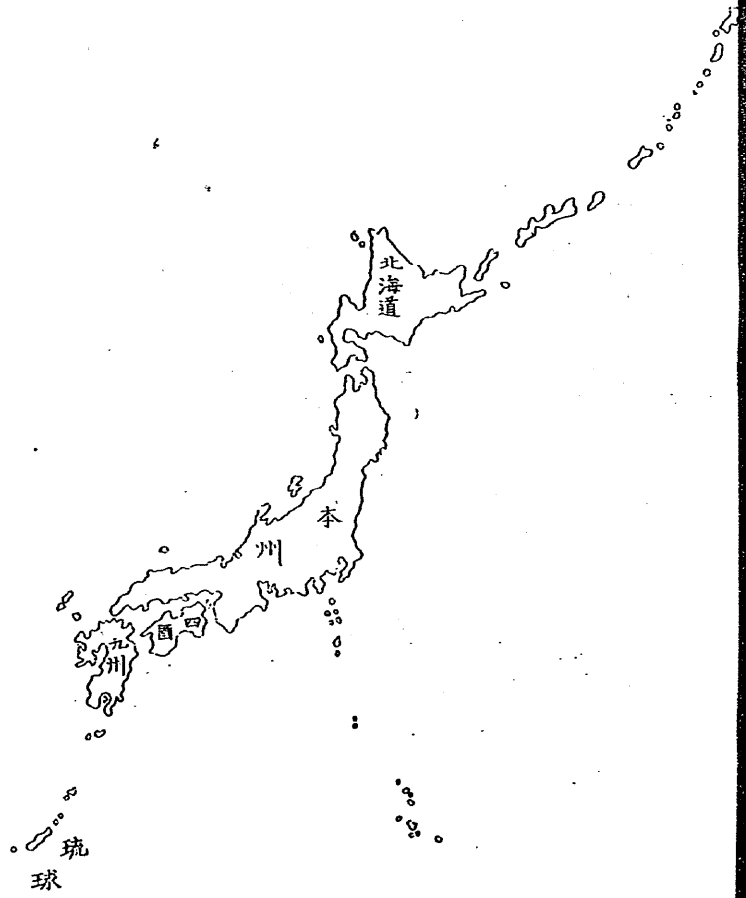
漆ノ細工ハ、世界中ニテ、我が國ニ及ブモノナシ。

漆 適 蠟 液 繪 膳 椀 硯 模様

第十九課

大日本

我が大日本ハ、四箇ノ大嶋ト、數多ノ小嶋トヨリ成レリ。其中央ノ最モ大ナルモノヲ、本州ト云ヒ、其北ニアルヲ、北海道ト云ヒ、西南ニアルヲ、九州ト云ヒ、本州ト九州トノ間ニアルモノヲ、四國ト云フ。九州ノ西南ニハ、琉球諸嶋アリ。日本ハ、嶋國ナレドモ、氣候溫和ニシテ、地味肥エ、産物豐ニテ、穀菜ニ不足ナク、山ニ



ハ、多ク金銀、木材ノ類ヲ出シ、海ニハ、夥シク魚介ヲ産ス。又生糸、茶、塗物、陶器等ノ産物アリ。多ク外國ニモ賣出シテ、其名高シ。且ツ到ル處ニ、美シキ景色アリ。眞ニ世界ニ比ナキ愛スベキ國土ナリ。

州 豐 魚 介 陶 器 到 比

第二十課

外國

世界ニハ、我が大日本ノ外ニ數多ノ國々アリテ、イロ／＼ノ人種住居レリ。中ニモ、アメリカ、イギリス、フランス、ロシヤ、ドイツ等ノ國々ハ、富强ニシテ、最モ能ク開ケタリ。

此等ノ國ノ人々ニテ、我が國ニ來リ、商業ヲナスモアリ。或ハ教師ナドトナリテ、留レルモアリ。又支那朝鮮ハ、我が國ニ近ク

テ、昔ヨリ交通セシ國々ナリ。

我等日本人ハ、世界ニ比ナキ國土ニ、生マ  
レタレバ、各奮勵シテ、益我ガ國ノ光ヲ添  
ヘ、彼等ノ國ニ恥ヂザランコトヲ心ガク  
ベシ。

支那 奮勵 添 恥

第二十一課

日本の武勇

今より、凡そ六百餘年前、支那元の國より、  
使を我が國ニ遣し、よゝみを通せんこと  
を求めしが、其書の無禮なりゝをもて、時  
の政をとれる人、北條時宗、之を逐ひ退け  
たり。

其後、又屢元より、使を遣しけれど、時宗、或  
を之を逐ひ、或を之を斬りければ、元の主  
大に怒り、數千艘の軍艦を、我が國ニ向け



壹岐對馬をかたゑて、九州ふ攻め寄せたり。我が兵皆勇を奮ひて戦ひけるが、中にも河野通有と云ふものも、其子と共に、小舟をこぎ寄せ、帆柱を倒して、敵の船ふさしとたし、其大將と覺し

きものを生けどれり。

かゝる有様あれど、敵を容易く岸ふ上り得ざりき。たましく大風起り、敵の軍艦皆碎け、れど、敵兵たほかさたほれしが、残れるものども、船を繕ひて、逃げ去らんとするを、我が兵押し寄せ、散々にうち破りて、みちあるしにせり。

初め元の兵十萬と聞こゆしが、僅に三人



を生け残し、戒めてかへりけり。是れより  
後、元また來りあだせむなりぬ。

遣 求 逐 退 艘 軍 艦 攻  
倒 碎 繕

第二十二課

我が日本

我がひのものとひとぐも、やま  
と心をもと、いそとつくみ人を  
うちあひけ、御國をひかりかゞや  
かせ。

我がひのものとけひとぐも、たけ  
くやさしきあゝろも、いそみ  
むつびもろともふ、君とれやとに  
つくまべ。

尋常小學校讀本卷七終

明治二十五年九月廿八日印刷  
同 年十月十日出版

定價金八錢

編輯兼  
發行者 倉知新吾

石川縣金澤市片町五十六番地之三  
同縣同市安江町十番地

發行者 近田太三郎

同縣同市上近江町四番地

印刷者 廣瀨與作

發行所 金澤市片町 益智館

同 同市安江町 古香堂

